

英学史の研究

竹中龍範

(1) 学会・学界の動向

2013年9月7日、IOC総会において2020年のオリンピック開催地が東京と発表されて日本中が沸いたが、本年2014年は前回の東京オリンピック開催からちょうど50年に当たる。この1964年東京オリンピックを英学史の研究対象とするにはまだ時代が若いと言われるかもしれない。しかし、実はこれより更に前、1940年のオリンピックが東京で開催されることになっていたが、すでに戦時体制下にあった日本はその開催権を返上した。この幻の東京オリンピックに向けては東京市が市職員の英語教育を計画し、また、民間では *Olympic Conversation* なる英会話教本が刊行されるなどして、軽い英語ブームが起きているが、これは、英学史研究の対象として取り上げ、史実を明らかにして後世に残すに十分値する事項であろう。

さて、当年度(2013年4月から2014年3月)は、特に出版物のほうで豊かな収穫の得られた一年であったが、まず学会・学界の動きを見ておきたい。

日本英語教育史学会の第29回全国大会(大阪大会)は5月18日(土)・19日(日)に四天王寺大学藤井寺駅前キャンパスを会場に開催された。初日は、新進気鋭の赤石恵一、榎本剛士、寺沢拓敬をパネリストに迎え、シンポジウム「英語教育史研究のフロンティア：研究方法論への提言」が行われてそれぞれが軸足とする研究方法論を述べ、熱のこもった議論を交わした。この後の時間と翌2日目とにわたって研究発表が行われ、隈慶秀「青木輔清と『有馬私学校蔵版英和掌中字典』」など7本を聴いた。

この全国大会開催の5月を除く毎奇数月には研究例会が開かれ、毎回1、2本の研究発表が行われているが、当年度も第243～247回研究例会において、河村和也「私立郁文館の英語教育」など9本の発表を聴いている。

日本英学史学会の第50回全国大会は、9月28日(土)・29日(日)に慶應義塾大学(三田キャンパス)を会場に開催された。日本英学史に大きな役割を果たした慶應義塾における全国大会が今回が初めてというのは不可思議とさえ思えるが、記念大会にふさわしい内容であった。初日は総会に続きマッギル大学名誉教授太田雄三による講演「英学の終焉と学生の英語力の低下——それでも英学の終焉は進歩だったか」を聴いた。2日目は22本の研究発表が行われたが、北垣宗治「慶應義塾と同志社」、西口忠「大阪慶應義塾の設立」など、慶應義塾・福沢諭吉関連のものが半数を占めた。

同学会の本部例会が2013年度より奇数月第1土曜日の隔月開催に変更されることは本年鑑昨年度版に紹介したが、5月からの奇数月に第482～487回の例会を催して飛

回顧と展望

田良文「福澤諭吉訳『増訂華英通語』の増訂について」等、6本の発表が行われた。

一方、同学会各支部においては、まず、東日本支部が第18回東日本支部東京大会を2014年3月28日(金)、いきいきプラザ一番町にて開催した。研究発表には速川和男「日本英学史学会——創成期の思い出」、河元由美子『『英米對話捷徑』を読む』などがあった。研究大会で先立って国会図書館を見学している。

北陸支部は、2014年度の全国大会(福井大会)開催に向けてその準備に取り組み、あわせて、この全国大会で大会会長を務める山下英一による特別講演「グリフィスと福井」が福井県立図書館を会場に2013年11月17日(日)に催された。

関西支部では、2013年6月8日(土)、第49回支部大会が桃山学院カンタベリー記念館を会場に開催され、石倉和佳「新島襄未公刊書簡について——協会同年問題めぐって」ほかの研究発表があった。また、第22回研究大会は、2013年8月31日(土)、同志社大学アームストロングハウスにて開催され、佐古敏子「幕末・明治初期英文典における『動辞分類の変遷』について」等の研究発表を聴いた。

中国・四国支部は、研究例会を春と冬とに開催しているが、通算第68回となる当年度第1回研究例会は、安田女子大学を会場に2013年5月25日(土)に行われ、安部規子「京城中学校の英語教育について：中学修猷館との関わりを中心に」ほかの発表を聴いている。第2回は、山口市歴史民俗資料館にて同12月14日(土)に開催、山口県地方史学会長・元毛利博物館館長の小山良昌による講演「杉孫七郎の渡欧と長州ファイブ」を聴いた後、大村益次郎関係資料を展覧し、研究発表「松下村塾最後の門弟 正木退蔵と吉田寅次郎」(上杉進)を聴いた。

九州支部は、2013年6月29日(土)に久留米市のホテルニュープラザ久留米を会場に支部総会・研究発表大会を開催して、本田憲之助「熊本洋学校の授業の考察」など5本の研究発表が行われた。

学会賞については、まず、日本英語教育史学会の学会賞が赤石恵一に贈られた。『日本英語教育史研究』第28号(2013年5月)に掲載された「札幌農学校教授 W. P. Brooks の英語教育とその結果：書簡調査から」が評価されたものである。日本英学史学会のほうは、総会席上に発表される豊田實賞について、本年度は該当者なしという選考報告であったが、後に紹介する『熊本洋学校教師 Capt. L. L. Janes 研究——足跡と功績』(2013年4月)によって石井容子が日本英学史学会奨励賞を授与された。

英学史関係の資料展等については、現在の研究社『新和英大辞典』の基となった『武信和英大辞典』の編者であり、*The Japan Times*ならびに『青年』(のち『英語青年』)の創刊にも関わった武信由太郎に係る「生誕150年記念展覧会 郷土の偉人 武信由太郎」が2013年9月14日(土)～11月4日(月)、鳥取市あおや郷土館において催された。解説書『郷土が誇る人物 英語学者 武信由太郎』が発行されている。

また、横浜開港資料館では、1863(文久3)年に J. C. Hepburn によりヘボン塾が開

英学史の研究

かれて150年になるのを記念して、同塾を基とする明治学院との共催により、ヘボンゆかりの資料を中心に、資料展「宣教医ヘボン——ローマ字・和英辞書・翻訳聖書のパイオニア」を2013年10月18日(金)～12月27日(金)に開催した。

当年度中の物故者として、G・フルベッキの事績を明らかにし、その足跡を追っていた村瀬寿代が5月に、日本英学史学会広島支部(現、中国・四国支部)の第3代支部長を務め、その発展に尽くした寺田芳徳が8月に、それぞれ幽明界を異にしている。また、幕末ペリー来航の5年前、ラルド・マクドナルドに英語を学んだ蘭通詞14名中に堀達之助が含まれていたと伝えられる基となったルイス・村上説に対して、これは堀寿次郎であったと明らかにした長谷川誠一が当年に逝去しているが、その功績は大きい。

(2) 単行本

石井容子『熊本洋学校教師 Capt. L. L. Janes 研究——足跡と功績』(佑啓堂、2013年4月)は、上述のごとく、日本英学史学会奨励賞につながった力作であるが、著者が熊本大学に提出して学位を得た同題の博士論文に加筆、修正を施して公刊されたものであり、綿密にジェインズの足跡を追っている。

昨年度分に漏れたが、ヘボン編訳『和英語林集成』初版ロンドン版が木村一の解題を付して復刻された(雄松堂、2013年1月)。年度が明けて木村一・鈴木進編『J.C.ヘボン 和英語林集成 手稿 翻字・索引・解題』(三省堂、2013年5月)が刊行された。明治学院大学図書館所蔵の「ヘボン自筆ノート」に含まれる『和英語林集成』編纂準備のための「手稿」を翻字し、索引を与え、解題を付したものである。ヘボンがどのような辞書作りを志向していたかを読み取るための貴重な資料と言えよう。

寺田芳徳『海軍兵学校英学文献資料の研究——広島大学転用図書に基づく、目録の作成、英学と福音・言語教育と平和への望み』(溪水社、2013年4月)は、終戦にともなって江田島の旧海軍兵学校から広島大学に移管された図書を調査して目録化を行い、その英学史的意義を探ったもので、副題後半の内容に係る論考を併せ収めて著者の英学史研究を集大成している。

英語教育協議会/ELEC 史編纂委員会編『英語教育協議会 日本の英語教育とELEC』(一般財団法人 英語教育協議会、2013年5月)は、戦後の英語教育界、特に中学校の英語教育において Charles C. Fries の Oral Approach を推進した日本英語教育研究委員会、現在の英語教育協議会(略称はともに ELEC)の60年に垂んとするその足跡を録したものである。

田澤耕『〈辞書屋〉列伝——言葉に憑かれた人びと』(中央公論社、2014年1月)は、自らもスペインのカタルーニャ語の辞書を編んだ著者が、OEDや『スペイン語用法辞典』などの編纂をめぐり、その編者の業績を立志伝のスタイルでまとめているが、

英学史関係では、英学を背景に『言海』を編んだ大槻文彦、日本の英学の発展に大きな影響を与えたウェブスター及びヘボンが取り上げられている。

蘭学史関係では、伊豆菰山の代官を務めるも、蘭学・砲術を修めて、幕府に海防を説き、菰山に反射炉を設けるなどして、「勝海舟が絶賛し、福沢諭吉も憧れた」（本書表題冠）という江川坦庵英龍の事績をまとめた橋本敬之『幕末の知られざる巨人 江川英龍』が角川 SSC 新書の一冊として 2014 年 1 月に出ている。また、露学史の方面では杉本つとむ『十八・十九世紀 日魯交流人物史話』（東洋書店、2013 年 11 月）が、日露交流初期の時代にその橋渡し役を担った日露人 5 組を取り上げて各組における交流を描いている。

一方、日本語学、翻訳論に係る英学史関係のものとして、亀井秀雄『日本人の「翻訳」——言語資本の形成をめぐる』（岩波書店、2014 年 3 月）は、「幕末から明治期、『翻訳』という営みを通じて、日本語の文体はどのような自己認識をもち、変化していったのか。それは単なる外来概念の移入ではなく、書き言葉と話し言葉に隔たりがあり、漢語・雅語・俗語の絡み合う日本語が、自らを組み換えていく経験であった。その諸相を、英語学習教科書（中略）など、豊富な事例から浮き彫りに」（同書カバー折り返し）しようとする試みで、「江戸期の蘭学者にとっても、翻訳の原義は『転ジテ漢地ノ言ニ成ス』ことだったらしい」など、興味ある解釈が示されている。

同じく岩波書店発行に係る「そうだったんだ！日本語」シリーズ中、英学史の関連では、まず清水康行『黒船来航 日本語が動く』（2013 年 5 月）が、ペリー来航（1853）に端を発する条約文及び幕末外交文書をめぐって蘭通詞たちが挑んだ和文、漢文、英文、蘭文間の翻訳を分析して、近代文章語成立史の初期の事情を探っている。次いで 10 月には、南蛮時代の宣教師からオランダ商館の人々、欧州の日本学者、幕末の外交官・宣教師による日本語の観察・記述の跡をたどった山東功『日本語の観察者たち 宣教師からお雇い外国人まで』が刊行された。

(3) 紀要論文等

紀要論文等については紙幅の関係で、研究ノートや書評等を除き、論文のみについて著者・論題を掲げる。

まず、日本英語教育史学会の『日本英語教育史研究』第 28 号（2013 年 5 月）は、赤石恵一「札幌農学校教授 W. P. Brooks の英語教育とその結果：書簡調査から」、藤本文昭「高校英語教科書（読本）について：戦争・平和に関する題材を中心に 1959 年度、1966 年度、1975 年度を比較して」、斎藤浩一「明治期後半から大正初期における英文法教育史——英文法擁護論と、『英語教育』内における理論化過程を中心に」、竹中龍範「商業科附設時代の小学校英語——横須賀市立高等八幡山小学校の場合」、田畑きよみ「明治初期の京都番組小学校における英語教授計画：他校との比較を通して」の 5

英学史の研究

本のほか、全国大会記念講演録、茂住實男「英語稽古草創のころ」を収める。

日本英学史学会の『英学史研究』第46号(2013年10月)は、長谷川勝政「本田増次郎のユーモア観：『英學新報』『英文新誌』『英語青年』の寄稿文から」、小林信行「イギリスにおける平田禿木(2)」、岩上はる子「『英文学叢書』と岡倉由三郎——日本の英文学受容について」、齋藤晴恵「わが国におけるキーツ受容——キーツ百年祭と豊田實」、加藤詔士「荘田泰蔵のグラスゴウ大学留学」を収めている。

同学会の各支部からは、東日本支部より『東日本英学史研究』第13号が2014年3月に発行され、出村彰の特別講演「グリングの『それから』——二つの宣教論」のほか、志子田光雄「英学史の周辺 登録有形文化財『デフォレスト館』をめぐる」、沼倉研史「Harriet Gring の来日前の手紙 日本宣教への決意と不安」、高畑美代子「イザベラ・バードが出会った日本人クリスチャン」、吉村侑久代「鎖国時代の外国人による日本語俳諧」、堀孝彦「蕃書調所頭取・古賀謹一郎の構想と思想」、石原千里「静岡学問所と名村五八郎元度」、宮田和子「肖像・風景画家チネリーをめぐる」、武市一成「松本亨再考」の8本を採用している。北陸支部、関西支部からは当年度、紀要の発行はなく、中国・四国支部の『英學史論叢』第16号(通巻36号)(2013年5月)は、竹中龍範「入江祝衛『英文法辞典』をめぐる——隠れたコロケーション辞典」、野村勝美「『出家とその弟子』の「序曲」——原文と英仏訳文との比較考察」、藤本文昭「太平洋戦争下の愛媛県今治地域での英語教育」の3本を掲載している。

『東北学院英学史年報』第35号(2014年3月)は、赤井規晃「山川訳ダンテの生みの親——忘れられたダンテ学者大賀壽吉について」、西山公紀「西山良雄先生と東北学院での思い出」、砂澤健治「鈴木策一先生流の英語学と英語教育」を収めている。

他には、昨年度分も含め、江利川春雄「明治期の小学校英語教授法研究(4)——柰田與惣之助『英語教授法綱要』の翻刻と考察』『和歌山大学教育学部紀要——人文科学』第63集(2013年2月)、三好彰「宮崎元立と英学(続々)——生麦事件と『英吉利文範』を中心に』『佐賀大学地域学歴史文化センター研究紀要』第7号(2013年3月)・「『語厄利亜語林大成』と『英和对訳袖珍辞書』に見る黎明半世紀の英学の進展』『東京大学言語学論集』34(2013年9月)、竹中龍範「崎山元吉『外国語教授法改良説』をめぐる」『言語表現研究』第29号(2013年3月)・「『ENGLISH』誌をめぐる」『英語と英文学と——田村道美先生退職記念論文集』(2014年3月)・「重野健造『英語教授法改良案』をめぐる」『英語教育学研究』第5号(2014年3月)などがある。

(4) その他

前節の紀要論文等に紹介した日本英語教育史学会、日本英学史学会本部・支部の紀要に採択の論文以外のものは抜刷等を受贈したものを取り上げているが、調査範囲には限界もあり、ご協力をお願いしたい。

(香川大学教授)